

書評

エネルギーと環境

著者：佐藤正知，蛭沢重信
 発行：三共出版
 定価：1,500円（本体価格）
 評者：小山 清（大阪市立工業研究所）

地球環境サイエンスシリーズの第6巻として刊行された書籍である。このシリーズは、環境に関するさまざまな問題を科学的に浮き彫りにし、経済や社会との関りを明確にし、環境問題の正しい理解とその原因や対策について解説することを目的としている。

我が国では、省エネルギーについても可能なところは相当進んできているが、最近、再び石油の輸入量も増加傾向に転じている。このような状況下で、新たな課題に直面し、人間活動の拡大、地球の温暖化とエネルギー問題、地球の食糧安全保障問題、人口動態、情報化社会の中での新たな問題などに対して緊急な対応が求められている。

本書は、日常生活に深く関わっているエネルギーと環境を考える上で欠かせない個々の要因について理解するために、第1章ではエネルギーをめぐる世界情勢に

ついて、第2章、第3章では化石燃料、原子力発電について、第4章ではクリーンエネルギーの開発について、地熱、風力、太陽エネルギー、燃料電池、水素エネルギーを取り上げ、また、第5章では核融合に関する研究について記述している。著者らはこれらの内容から、大量生産・大量消費経済体制の中で、地質学的年代にわたり蓄えられた資源とエネルギーを急激に消費し、快適な生活を守ってくれている環境を破壊しつつある。今後は物質文明を豊かにしてきた科学技術を環境保全の分野でも積極的に推進することが重要であると提案している。

本書は、各章とも基礎的な内容が豊富に取り入れられ、また、図表も多く取り入れられていて、大変理解しやすい。さらに、各節の最後には、各項目と環境問題との関りに関しての記述もあり、環境問題との関連についても整理しやすい。一般の社会人でエネルギーと環境との関りについて関心をもっておられる方々や専門的にこれから学習を始められる方々の入門書としてよい書籍であると考えられ、一読をお薦めできる書籍である。

書評

世界でいちばん住みたい家

著者：赤池 学，金谷年展
 発行：TBSブリタニカ
 定価：2,000円（本体価格）
 評者：吉田 英生（京都大学）

誠に興味深い書であるとは思いながらも、評者は全389頁の本の中盤に読み進むまでは、果たして本書は「エネルギー・資源」の書評コーナーで取り上げるべきか否か、迷いを感じていた。表題どおり、内容は家、しかもその内容は北海道の中堅住宅メーカー「木の城たいせつ」の家造りを中心とするものであったからである。しかし、百年の計に立脚した「最後の耐久性、それは地域との調和性である」（211頁）に達したときに、その迷いは消え失せた。

北海道夕張郡栗山町、札幌の東30キロにある小さな町に本書の主役「木の城たいせつ」の本社工場がある。創業オーナーは山口昭氏、ベストセラー「もったいないー常識への謀叛」の著者でもある。評者は本書で初めて知ったのだが、「木の城たいせつ」は、カナダで開催された国際環境見本市Glove92で「サステナブル・ディベロップメントの見本だ！」と絶賛され、国内で

も1995年に日本経済新聞社が主催する最優秀先端事業所賞を受賞した。

同社の企業哲学を一言で表現するなら、同社のシンクタンク「冬総研」の情報誌の名前にも取り入れられている「バイオ・リージョン（生命地域主義）」に他ならない。同書によると、バイオ・リージョン実現のための条件の一つは「地域循環型」すなわち、資源、食料、エネルギーを、地域をベースとして循環させる産業システムの構築である。そして、この目的のためには、地域の気候、地域独自の時間までもを資源とみなす。同社は、この哲学にのっとって北海道のみでの木造住宅供給を頑なに貫いてきた。

同書の後半部は、このような「木の城たいせつ」の家造りを通して

第四章 未来をこわす家、未来をつくる家

第五章 地域を滅ぼす家、地域を輝かせる家

第六章 心を蝕む家、心を育む家

へと発展する。そこでは地球環境問題はいうまでもなく、児童労働、ドラえもん、ゲーテ、インディアンも登場する。その多角的な議論には感心した。目からウロコが落ちる思いのする部分も少なくない。警世の書として一読を強くお勧めする。